等高線

後藤隆徳

ハートはいつも黒字だ

登場人物・・・秋のバスハイク茅ケ岳に応募してきた年配の男性
秋のバスハイク受付担当係・私

年配・・・「どの位かかるんかネ」
私・・・・「（募集要綱にも書いてありますが）普通に歩いて（この場合１時間に標高差で４００m位のゆっくりペース）２時間３０分位ですね」
年配・・・「きついんかネ」
私・・・・「うーん、個人差がありますから何とも言えませんが、普通に３時間位歩ければ大丈夫だと思います」「運動はしてますか？」
年配・・・「うん、歩いてる歩いてる。毎日、道路を１時間は歩いてる」
私・・・・「うーん、毎日歩いても平らな所では運動効果は小さいんですね。神社の階段なんか腿を上げるとイイんですヨ」「最近登った山は？」
年配・・・「行った行った。乗鞍岳と霧ケ峰」
私・・・・「どこから登られましたか？」
年配・・・「うーん。車で上まで行ってサ、うんと楽だったヨ」
私・・・・「それでは大体１時間半位ですか。それはいつの事ですか？」
年配・・・「去年の夏かなあ」
私・・・・「・・・。」「失礼ですけどお歳はいくつですか」
年配・・・「７２になる」
私・・・・「うーん、お声は元気そうですが、大丈夫ですか」
年配・・・「大丈夫、大丈夫。なに、お宅は年齢制限しているの？」
私・・・・「年齢制限はしていません。うちの会でも６７で元気に登っている方もいるし、６０でヒマラヤの５５２０mに登頂した方もいます。その方は女性ですが僕達と毎年冬山も登ってます。要は環境ですね」
「以前毎日歩いてるという年配の方の応募がありました。話を聞いてお断りしたら、なら試してみろということで、下見に同行してもらいました。道志山塊の割石山なんですが、歩いて５分、入り口の階段の途中でもう駄目で、山中湖でお弁当食べて帰っていただきました」
私・・・・「どうでしょう。あと１ケ月ありますから、毎日少し階段登りとかでトレーニングして、力がついたら参加ということにしたら」
年配・・・「そうですね。そうします」
私・・・・「すみません。よろしくお願い致します」

今回の秋のバスハイク茅ケ岳には高齢の方の応募が目立った。最近の野外健康指向の表れと思うが余りの高齢はやはり心配だ。勿論、参加は年齢制限がないので年齢で篩（ふるい）に掛けることはない。

要は本人の「運動能力と健康度」なのだが、説明会はなく本人に会えない電話応募の場合、結果、当然いろいろと話しを聞いた上で判断することになる。まあ、いろい

ろと話しをしてみれば今までの経験と勘で大体のことは分かるものだ。

ただ以前、美しケ原バスハイクで焼山沢を登った時、両太腿を痙攣させ大変な目にあった女性がいたが、その方はけっして高齢者でなかった。ただ少しだけ「体重」があった。まさか「体格は？」「体重は？」とは聞けないし、実際に会って確認出来ない難しさはそんなところにもある。

話してみるとちょつと不安な方もいるが、基本的に、地域に根ざした活動を主眼とする市民の山の会としては、なるべく「参加の方向」で検討する。しかし、無理な時は無理とハキリ言わなければならない「勇気」も必要。「安全登山」と「市民の要求に応える」折り合いは難しい。

恐らく高齢の方はどこでも断られる傾向があることを考えると「安全登山」のためとは言え胸が痛む。医師・看護婦（幸い当会は双方揃っているが）を準備し、コース設定はソフトにし、逆に「高齢者ハイキング・強い方お断り＝７０歳以上の方に限ります」なんて企画を来期は是非実施したいと思う。（これが本当の高嶺登山）

■

２～３年前バスハイクで櫛形山に登った時のこと。私達は昼食を終えゆっくり休憩し１３：３０北尾根を下った。しばらく下ると、革靴を履きブレザーを着て近畿ツーリストの小旗を持った男を先頭に老若男女がゾロゾロと登ってくる。ツアー登山らしく先頭の男は「山岳ガイド」でなく「旅行添乗員」のようだ。

しばらく下って行くと最後に風呂敷を背負ったオバアさんが一人登ってくる。ちょっと心配なので聞いてみると先程の近畿ツーリストの参加者という。例の「添乗員」とは３０分は離れている。しかも、まだ昼食も摂っていないと言う。

なんでも早朝東京を出発したが、渋滞にはまり登山開始が大幅に遅れたとのこと。ツアー会社は、遅れようが何しようが、とにかく「実施」しなくては「金」にならない。結果、このような「暴登」が生まれる。

天候など条件が良ければ、これで問題はないかもしれないが、悪条件になった場合登山の力量がない「添乗員」ではどうにもならない。

そんな典型的な例が先日の羊蹄山（本来は、後方羊蹄山＝しりべしやま）の遭難である。詳細は不明なので安易な論評は避けたいが、新聞報道などによると、このツアーを実施した大阪の「京阪交通社」は驚くべきことに「ツアーの申込者に、登山経験について確認はしていない」という。

正に信じられない事である。事は礼文島に花を観に行くわけではない。レッキとした登山である。海水浴に行くのに泳げるか、泳げないか確認しないで連れていく「馬鹿」はいないだろう。いや、もしいて、溺れさせたら、その人は立派な「殺人者」で「大馬鹿者」である。今回の事故はそれに近いのではないだろうか。

■

結局、ツアー会社はお客の真の要求である「安く楽しく安全な」登山など毛頭にない。怪しげなアルバイト的添乗員まがいのツアー・リーダーを押しつけ利益追求をする。その片棒を担ぐツアー・リーダーはあくまで雇われの身。いくら優秀な「山岳ガイド」認定制度を制定しても、企業の姿勢を正さないかぎり悲劇は繰り返される。

我々のバスハイクはボランティアである。「安く楽しく安全な」登山には相応の「労力」は当たり前。下見をしたり多くの会員の力も借りる。採算的には苦しいが手抜きはない。「ハートがいつも黒字」なら十分満足である。

【Ｎ０・５１　９９・１０・０４】

注＝１時間４００ｍは、２５０ｍの誤り。